



特
へ 13
2937
1
16

春色恋深分解初編序



思ふがごとく我もさるる志はげしくしむるはまの
 宿を那の道のきこゆる家修郎のよの地ある
 駕高松よりたのふいふふの吹雪あふはるる
 けしきわがまふ人ふえおろさやわらふはり
 はるがど川よれりたのふのたすのたすの
 五條のよはるる帆をたて舟がたはるる
 とさるる遠き事あはし歌を唱へるる

昭和九年
七月九日
購本

129
精



深谷初口二



春色戀遍深分解卷之上

江戸

朧月亭有人作

第一回

今を時め、鎌倉へ焚木焦るゝ山さても春ハ
櫻ふ黄昏夜をーみ悉く下の燈籠へ入秋の
夜の鶴滝とあつめり愛小武藏と相摸の夢よ
あつめり梅のあつめり衣女園梅とを咲かす心
折りの樂屋八寶よ月千両の名室ーくさるる



鎌倉
柳川岸の

唄女
小金

見よおの
あつめり
梅
洲

染夕初口四

柳の巻を酒樓舟宿軒成あり人系竹の頭
かまびまきそ縁おりあそび実の軟味地との木
舟一あり園のや小万とそ多勢穉ある頃
ありまがたハたそ也た柳腰さるのみどりふあび
のバ奴くとも異名せりされバを諸人を諸皆月懐の
先ぞあそび人ふそ多は我うふといひむりのみそ人
多うれバ今日あき長上聖美身代雨ざりた舟
折止納あるた日もちとあれハ二日ま入くら

日紙かひ紙ハ振くふかた流しつ子今日も
垢切のうまぐり不例の伊津屋の障子舟
寄ハ伊津屋のよ四角とそ備ふあゆむねとお
急よ金田りうた息子株借名と表島と吹
りの和毛ゆ渡りよくそ紙知るねといふとる
くれと我くらあそび老結人の宛をわき
代まそま実よその種をゆー女たろり
好男子あへそあひわぐ附候のそあひせ人うせと

冷くやうご小万さん 憚りごそつちの
子儀メめくかきる 一めんどうふ今日八念の
きうごごひまたあ方ともああませうう
女側ハ素様の書く 一おゆまご 格別ご
うう明くあううよ 一おねサ後人せんあう
ホで去るをちのいとおあもせうう 一まよらう
あう一之へあめく物とうあはちあアお氣の毒ご
子ト 親ゆひ ちまあわす ちまあわす ちまあわす
む某かんぞらやあむ一七のうごらうう

一アヤらやごを執るものせもあるとあなよ力ふる
よふごごひまはがらんる雑氣者でスう 誰も構ッて
呉人のありません 一遠く後人串談のひてかまを
感心の中あやアこまハつひうて 一味線の細
枕儀をつひ後人むらりのがまイ々れどもまごら
気あごど流りとの入の八実よあらの 一アヤマ
らんごあまよあがかりまはる子何ゆかひこの
分解ゆかんあんとあううけてもあひません

多くは格な高貴こそ志すはくれども人の
あぐさみよめのある氣のなす探出ありあり
とらふと恋玉ひきのやうなまが因女の屋みり
あゝお妻のやあり初々終まで終るまで
未だ是様よなるやうな人にて實のあるは
氣をあるゆえに物もあんなまり引をさす
やうな人とさぐて居まはうなあくあまは
あやふ不つり合をどおれはだく外も恍惚

人が多さうで若者の種ごううと夢ひま
「さうく小万さん総わげんおあはれなるゆ
さう若さをせらするやどの飛の縁へさうが候
おありは種まをみおの人のいざんる男が修治の
あふおをづなよありて人のいざんる男が修治の
ありはせんまご惚吐まをあやさうさうあ
ので志すのさの想いのやうな種であの
サトがー打替かりひい合もあるおううは



お箱あつたまのちやア云あくうごごのま
へとむとむのういのおくお叫る「は
川にお屋敷の控門にお出るまのうごごあま
せう「あやうく「史がどうあまう「
あ草のやうお終をえんあお笑の進ま「ハ
とあはまこのたう私あやアおもごう終人を
「「ハそ付は審顔といひお早「あう↑目
たうねで娘あてえんる女と一月でも情合と

あささう「云は「史がう死ん「
か私「ハ男はよまのう「
ハたあまうお思はん「
云茶と信ト「
のあ人「
早「女の心とさう「
ううの極みでもあまさう「
あ「あう「

さ由さゆ恨うらみめーしそりそり小男こねこの影かげ淡あかうち守まもりたる
形かたち振ふりハ加かの林やしきが香かほ紙し様ようよそ人ひと柳やなぎの枝えだよ
咲させつそ紙しまよさぬあめふあやめううと名な入いたさうの
ありさぬ小達ごだつ舞まゆここ見みありありありあのの渡わた倉くら由ゆ
持もち舟ふね新あらた辺へに居いる世よも男おとこ山やま小こ新あらた拾ひろりて誰たれ
管くだらとやいさんいさん花はな鳥とりが魂たまごたちまち小こ有あ頂たか天あま外そとよ
花はな鳥とりんんたうりら花はな「はなライライ小こ万まんさんさんああののううハハ人ひとと遠とほく
らの性しやうぞうぞうちみち紙しあがささせせそそのの紙し後ご悔かい

志しそもも木きぞぞままうう新あらた人ひとせせトトののひひるるががうう小こ万まんののいいまま
そりそり新あらた人ひといいまま小こ万まんハハあありりそそりり新あらた身みとと身みよよなな
りりくく形かたち赤あかららぬぬ花はな鳥とりよよあありりそそりり新あらた身みとと身みよよ
あありりそそりり「はなああんんざざううぞぞううくく新あらた紙しくくてて来きままうう
とと「はなままああううららああももメメややううとと花はな鳥とりハハ小こ舟ふねのの際ぎは
トトととメメるる小こ万まんハハあありりそそりり新あらた身みとと身みよよなな
志しまませんんううねねハハ去いるる小こ舟ふねでであありりとといいふふ人ひとをを其そのううちちにに双さう方ほう
志しままううくくいいふふ新あらた人ひとでであありりとといいふふ人ひとをを其そのううちちにに双さう方ほう

第二回

斬首くわつて降参りて明たふふ川をまどらふ
かえの降参りもあけんとせしむ 「そのちの人の重
参り参り 「史でもあつたよまのものを 「かお今
まのよとまのよちやうわう 「おまをうり果うをを
おまのよとまのよちやうわう 「おまをうり果うをを
おまのよとまのよちやうわう 「おまをうり果うをを
おまのよとまのよちやうわう 「おまをうり果うをを
おまのよとまのよちやうわう 「おまをうり果うをを

せん 史がらのの上織屋ちやアかりらるる織の史
ともゆらぬの裁のこの人ともあつた 「又せんら
「史かまをるよ先き成後を下めてとらうとわら
みまのちやアあませんウト洞ぐんで居る

はある小方もおのづらう 意ふふ長崎の降参り
の物々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
あははららのあははららのあははららのあははらら
織切の船中を走るる一日も走るる一日も走るる

あださくくその船宿わかれの三階窓びき
あふ かくくあまは何ふつひく引多多く男
あふ 女の身は皮紙剥くあ何れ神ど物まじ
あふ 老入せるのが風のどくとそ身あがりま
あふ 多うまはあまも小万の有りた後くさ
あふ せんとおのりあうう角あふの造化身か人第
あふ 早もはま旅紙一たが小屋まま実小
あふ 外の庭敷へあふつたましくお宿小味

てもさうい 養子のあひま紙之筋ふよそ人
あふ のろけのふゆふふま不無さあく自然と
あふ 後の敷へ入りあま希毎日のうた音あま
あふ も目トあひひそ家業ゆせまうくこと定と
あふ 外あふ不あ持不産く喰う人ハ大占も
あふ のたえまのあう今入二人う身のう人のつあ
あふ とこそああまよりあ呼せま死りのあ情合
あふ ぬるま死りのあ好男子あり



一 敬右忠の指愛おと一番考人の具形どのハハ
仲柳海峯のふ万との入唄女めふとまうり返り内を
外ある不身持申人か可電さうみ正新造ハお好
芝居ハ世もせむ知る 晩ま内肉の番人例をさる
さ人かいこもいそ指を不実なるよ四布ぶのふ
添くくおのこいお先が名ひやうまておの毒
神あつづもかあいうちの名案がは新案「ある
種か重ハ松の突の子とらるもまう一ふそぢぢが

愛の史持ふとせうをく育やうと拾ひ下ハア
お重敷あるぬ身を誰あらんか是人目お死権系権
のの家元職のほ子息が交種まてのほ傳ん何のい
がごさうませうとくとお重みゆ中世せとよいか
トのび び致さをませうき智うよの今に何の二百友とい入
西のうぶくお流はと二人技持ゆ二人技持とせぬま
知まごつたますきおあふもなぶ打ませう「水」
さ人あふまふそぢぢが

二人の申こゝろみ出できさるうき稚子ねのこゝろ「たゞは是れ私方わが人ひと引
きたまましその里さと杖つゑ持もちが月つきみ一ひととひと空あそ文ふみでまたたり
実用まじが遠とほひままひると天あま言こと成なりなりバハ「ままははがが」も
口くちににははふふ男おとこのこゝろみみつつてて「おおおくくのこのこみみ誰たれが
又またあんとあんんとと人ひとががここささりりまませせううトトのこゝろはは忠ちゅう六ろく横よこををどうどうも
忠ちゅう八はち義ぎのこゝろ我われのこゝろ張ちやう子し房ぼうままのこゝろひひつつてて「ああ
を人ひと今いまのこゝろはは「おおお茶ちやふふよよのこゝろやや遠とほひひのこゝろああるるああ「ハハテ
はは茶ちやふふのこゝろ及およびびまませんん「おおお君きみのこゝろ意いのこゝろ十じゅうフフみみハハッッ計けいををととり

深ふかくくししくく

のこゝろのこゝろ毒どくのこゝろ毒どくのこゝろ様よう坂さか氏し小こ万まんふふううつつととぬぬるるせせども
ととままもも矢や張ちやう五ご印いん布ふゆゆんんとと多たくく後ごのこゝろ意いのこゝろまませせるるのこゝろのこゝろ
ががううももふふ印いん布ふとと「おおおちちううままとと風ふうのこゝろまま後ご中ちゅうとと物ものの
ああるる人ひとのこゝろままととまま「おおおららのこゝろみみのこゝろ横よこめめのこゝろああのこゝろハハ義ぎ
のこゝろああるるががおお茶ちやふふのこゝろひひのこゝろままのこゝろままううととふふ印いん布ふゆゆ
のこゝろ茶ちやハハ持もちがが「おおお銀ぎん湯たうゆゆああるるややゆゆのこゝろ湯たうををままのこゝろ油あぶら
湯たうををままのこゝろどど「おおお細こまくく流ながるるままああががググ結むす妙めう「おおおままととままのこゝろ
ままのこゝろをを飲のみちちのこゝろのこゝろ「おおお明めい月げつ中ちゅうのこゝろままのこゝろ意いのこゝろままととるる」

あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの
あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの
春色戀廻 深分解 卷之上終

